

モノと情報班

ラオスにおける馬具と馬生産システムの研究 小島摩文（鹿児島純心女子大学）

キーワード：馬生産、荷馬、棒締頭絡、頭絡、馬具
調査期間・場所：2005 年 3 月 3-17 日、ラオス北部

Study of traditional horse tools and horse breeding system in Laos

KOJIMA Mabumi(Kagoshima Immaculate Heart University)

Keyword: horse/pony breeding, pack horse/pony, wooden hackamore, bridles
Research Period and Site: 2005, March 3-17, Northern Laos

1. はじめに

モノと情報班のおこなった日本国内のラオス資料のデータベース化の作業の中で、私は主に原野農芸博物館の資料を取扱ってきた。2003 年度の報告の中で指摘したように数多くあるラオスの民具資料の中でも特に注目されるのが衣服関係資料と馬具資料である。2004 年度は、その中でも馬の制御具である棒締頭絡について重点的に調査・研究することとした。原野農芸博物館収蔵の棒締頭絡は中国西南部、タイ北部、ラオス北部から主に収集されている。このことからラオスでの調査地をラオス北部、特にボンサリー県を中心に行うこととした。

棒締頭絡はハミを用いない馬の制御具で、日本では南西諸島と北海道で現在も行われている。これまでの私の国内での調査から、棒締頭絡は本来は、去勢していない雄の荷馬に用いる道具ではないかと仮説を立てた。そして、去勢していない雄馬を荷馬として使役する地域は、馬の生産を牧で行っている地域であることもわかってきた。こうした国内での成果をふまえラオス北部およびその隣接地域の馬の制御具と馬の生産方法を調査することでこの地域の馬利用の実態と日本の事例との比較をおこない、日本国内での仮説がこの地域にも該当するか検討する。

2. 調査地の現状

1) 馬の分布

今回の調査ではラオス北部のボンサリー県の内、ブンタイ郡とその周辺の農村で馬を飼育している人を訪問して話を聞くという方法をとった。近年、ラオス北部では中国との商取引が活発になり、中国の資本による道路開発が行われているという。サトウキビをラオスで栽培させ、中国の業者が買い付けていくということであったが、その運搬のために道路をつくっているという。こうして道路ができると、車が入り、オートバイが入り、トラクターが入りと動力化がすすみ、馬は消えて行ってるようだ。今回、道筋で馬が荷物を運んでいるのをみたのは道ができて 1 年ほどしかたっていない地域ばかりだった。

カム、モン、アカ、プーノイ、タイ・ルーについて調べることができた。

2) 馬の制御具

まず棒締頭絡については、モンでは使わず、他は使う場合とそうでない場合と両方あることがわかった。モンでは牛の皮の頭絡を使うといい（実際には植物性の縄や、現在ではナイロン製のロープも用いる）、他の人々は牛皮の頭絡を作れないので棒締頭絡をつかうのだという語りが聞かれた。モンに限らず、棒締頭絡を使わない人でも棒締頭絡の存在は認識していた。棒締頭絡を使っている人たちは、なぜ棒締頭絡を使うのかという問いに対しては、縄やナイロンロープのままだと馬を傷つけるので棒締頭絡を使わなければならないとしている。

また、中国の四川省・雲南省、タイ北部や前回のラオス調査とはことなり、今回の調査では、馬に乗ることが

あるかという質問に対しては、乗るという答えが一般的であった。また、西洋馬術式の乗鞍を所有している人も多かった。これはラオスが植民地を経験していることと関係しているかもしれない。購入先は中国が多かったが、以前はフランス軍や日本軍から乗鞍を入手したという話もあった。乗鞍を所有している場合、馬に乗る場合は無口頭絡や棒締頭絡ではなく、ハミをもちいるというのも一般的である。ハミは中国人から購入するというケースと自分で鍛冶をしてつくるというケースと2とおりあった。

オスの馬、メスの馬、去勢したオス馬のいずれを使役するかという点については、様々なケースがあった。ただ、経済的な価値、具体的には売買されるときに値段は去勢したオス馬、オス馬、メス馬の順にだんだん価値が下がっていくのが一般的だ。雌雄いずれの馬を使役するかと馬の生産形態とは有意な関係は見いだせていない。つぎに馬の生産についてみていく。

3) 馬の生産

馬の生産は体系だって行われているわけではないようである。積極的に馬の生産が行われていない大きな理由は、子馬の死亡率にあるようだ。自分が飼っているメス馬に子供を産ませてそれを売ったことがある人でも1頭売る間に2, 3頭は死亡している。また、毎年妊娠するわけではないので非常に効率がわるい。馬は牛に比べて生産という点で非常に難しい動物だという。

ある村ではオス馬しか飼わないというので、理由をたずねるとメス馬や子馬がトラに食べられてしまうからだというのであった。この村では、馬はすべてよその村からオス馬だけを購入して使役しているという。

馬の生産／入手に関しては3つの型に分けられる。ひとつめは、よその村から購入している場合。ふたつめは、自分の村で自給自足している場合。みつめは自給自足し、かつよその村に馬を供給している場合。メスを飼っている人が積極的に種付けをおこなうこともあし、田や畑に放しておいて勝手に妊娠することもある。種付けのオス馬は村の中のオス馬のこともあるし、他の村のオス馬を借りてくることがある。種付けにはお礼をするところと、お礼は失礼なのでお礼はしない(実際には種付けとは違う名目で金品のやりとりがある)と言うところとある。馬に関する情報はかなり広範囲にわたってやりとりされていて、馬の売買や種付けなどの交流を行っているようだ。

4) 中国・ベトナムとの関係

ある村では、灌漑工事のためのセメントを車が入れない山間の農地まではこぶために、中国の雲南省から馬方と馬が雇われてきていた。雲南から馬をトラックかなにかで運んできたのか、歩かせてきたのか不明だが、中国人あるいは中国の馬がラオスに仕事に来ている。なぜ、現地の馬を使わないのか聞き取りはできなかったが、現在でも中国から馬が仕事をしにラオスに入ってきている。

また、近年、道ができたためにいらなくなった馬をベトナム人が大量に買い付けているという。ベトナム人は馬をたべるからだと言われたが、インターネットで検索すると

「Tuoi Tre (若者)」紙に、うどん(フォー)に入れる馬肉用の「大量の馬がラオスから同(ゲアン)省に密輸され、その後ハノイに輸送される。心配なのは、密輸された馬なので、検疫は取り締まれないことである」[VLC 2005] という記事があった。安易に単なる語りだと思っていたが、現実には社会問題化しているようである。

3. まとめ

調査から帰国してまだ1ヶ月たたないのに、資料を細かく分析するまでにいたっていないが、現在、ラオスの馬を巡る環境は劇的に変わろうとしている。これは内在的な原因によってというよりも中国とベトナムというより富める二つ社会主義国との関係の中でモノと家畜の移動がひき起こしているといえるのではないか。もちろん言語的にも近いタイの影響も大きい。

今後は、こうした周辺国との関連を見ながら、ラオスにおける馬の利用文化の変容を見てみたいと考えている。

V L C (ベトナム生活倶楽部) 2005「Fujinet・ベトナム・ニュース・サービス」
ne.jp/~saigon/fujinet.htm (Tuoi Tre 紙 2003 年 12 月 10 日、P7)

<http://www2m.biglobe>.